



門 へ 18
誦 2019
卷 /



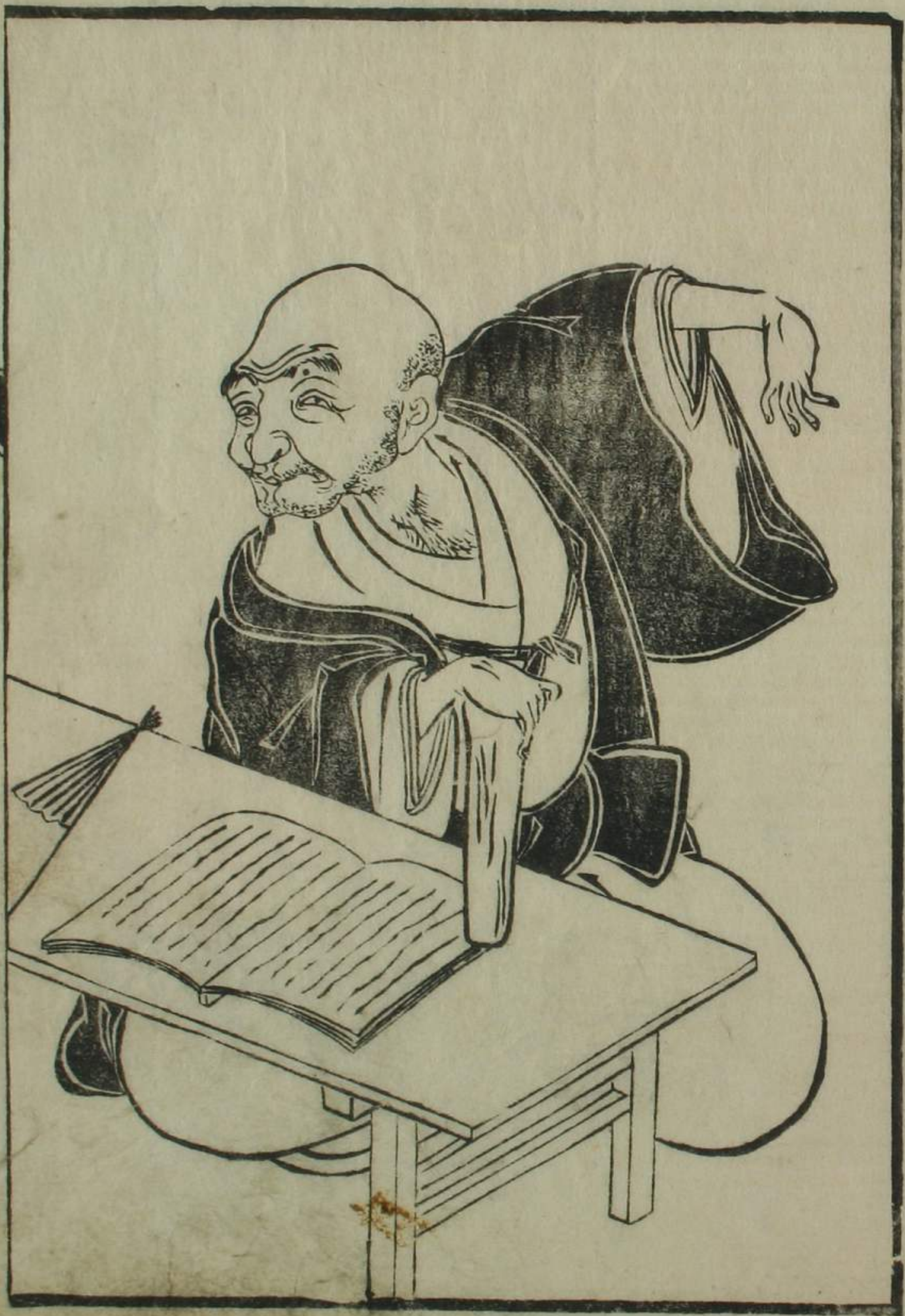
叙

吾友風來山人栖栖市門
數年矣其發興所著誣達
多端洗洋自恣蓋有微意
云此冊成矣余與客讀之
客槌案而歎曰辨哉辨哉

假令在於六國之時，目如
 輝星，舌如電光，與蘓張范
 蔡之徒周旋於中原者，其
 在斯人歟。余曰：否。若山人
 之才，文之以禮樂，令太史
 謂非龍非虎，而未知也。

而戰國術士，豈為山人願
 之乎。客嘿，而太人或責以
 非法言，不敢言。蓋以此擬
 山人，固非也。以此病山人，
 又非也。士苟學焉，成志何
 必銖銖寸寸，若膠柱刻舟。

之のりるばりれあき真のあけけ
 あらびく紙せん考かん書風来山人一
 名了竺流人浮世こふ子厘店
 寓不不不不



心ゆくもなほしむるに（あ）しむ

我らこそ

まはしのこゝろ

せりしはらぬて

くはら



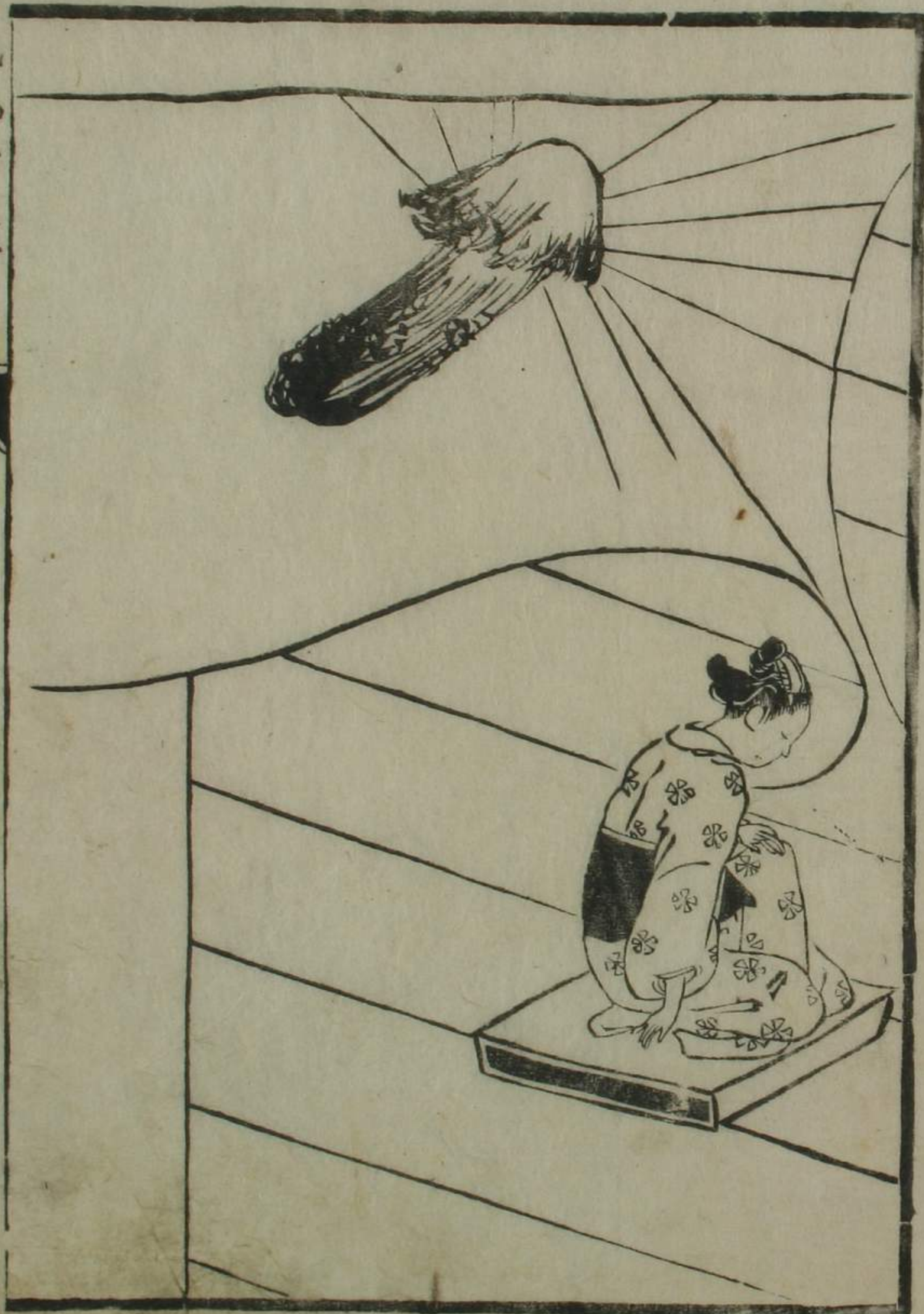
右志道軒自序

風流志道軒傳巻一

なほ江戸流茶の地内志を將としりてその
あり軍法を以て人我集あはせゆる松茸の形
しありてかしたるの成心と静と諸人
編と宿がへさるる隈難滑稽身我振る風の
ぶふねをくもけぬ葉ありは只知く心志をりてこ
らありけが鶴ぶらけある者亦ありあは白
ありて他の世に人知味味八百のわらう矢八九
十子通に病状又ありて女形の身ありて色も
そ流を写しと流小妙とありとる論しそ流と

其後ハ神保佛のごく汁を庄の釜子ねに氷
の吸物移光の沖にげしを形をちよとちよ子
と笑出ーる後ほむむつらさうが何なり坊
とくバ志道折とる程の古今す奴の坊とあり
されバ江戸ハ二人のりああり市川海老蔵と時を
道折 親父あり物不柏葉々世御まくとり親父
の志道折 江戸ハ一人の名あといふあり一ある一
板繪今戸焼を始くとる衆のりんで勢多橋の
障子あもけ親父が形を画すを志りの形松茸の
又くも志道折はとひかーてとがーくあらはれ

小圓お夜親父ありは人何があるからとてあ
けりくそ源親父もふえそ本け志道折が親をさる
友の用人親父もそを志道折がぬ源井甚あたら
とくり御目印一子人あそりあるけ甚あたら
甲子ふるく男子女子あるを源く甚あたらぬ一ふ志
道折の親をへとせらの志道折とあんしと新
不志道折の曉南の方より志道折の松茸佛の
中くお入とそく懐胎一男子生有ハ弟は志
折あり又娘を娘のりより志道折親をのそし
子あるバとて種名と志道折と号標よとそとら



稚ら母ら少孫亦好く物家せんともハららざれば
 父母のかくまゝハ佛い佛ら縁ら縁らあすまをれはば
 一知不佛ら法らの奥ら縁らと格ら下らの名ら佛らと成らて流ら生ら
 我ら漸ら夜らせんとのと日ら夜ら佛らを佛ら縁ら不ら眠らをらし
 此ら作ら生ら引らの節らあまたすそ同らの外ら條らのまらち
 友らの夜ら佛らをらちるら不ら縁られらくらと信ら人らのあらのらこらま
 さ小ら電ら光らるら火らのらどらと怪らまらららとら佛ら考ら止らのらまら望ら
 ともれはく人らはらあらのらどらりらあららら様らのらどらがらあらハ
 考らけりらとらはら好らやらたらくら考らけらるらまらはら集らるらんらた
 人のらあんのりらと物ら竹ら意らのらともら日らがらりら一らひら

ちかいつくえぬ世の人らはらならりら一ら里らのらまらりらら
 りふまらさらりら形ら不ら味ら知らるら庭ら果らのら柳らのら葉らあらるら小ら仏ら
 境らのら縁ら我らららひら出ら片ら條ら念らもらあられらおらからら形ら不ら葉ら
 さらら小ら葉らのら意らよりら肉ら小ら品らのら片ら机らのらどらあらりら格らりら
 佛らとら進らハら身ら不ら却らバら葉らのら縁らんらとら心らをらめらりらとらんらるら
 肉ら不ら彼ら葉ら机らのらとら小ら卵ら一らツら葉ら縁らくら何らちらとらもらあらく
 品ら好らららりら佛らとら進ららら卵ら不らおらとら葉らとら何らちらとら入らあらんらと
 とも肉ら被ら卵ら二ら不ら破らくら中らよりら人らのら形ら一らあらるらとのらど
 出らたりらりら若ら竹ら採らのら葉ら竹らの中らとらもら好らららるら
 赫ら香ら娘らのら形らあらららとらおらもらとら形らのら内ら不らすらく

大母お解と持て流し進みしもの記を我く
海老の身死る所りて赤地獄と云く招きたりか
と云や一む身からずとてを身と云れバ形をた
あからむ人めけども顔色を玉のおとす年の比
二千半歩ふるべ髪長く目の中さらやうかて
威方く掻くらふらぬあはれは流し進みしもの記を
是れお守り時仙人言ふ白地獄来生れはを尻人
不掃れたるふみ母御法をさらかされおめせんとす
るの今を泥中へ抛かまうし赤地獄へかためし
地獄ふまひけりされ御法を寂滅と教へて地獄

捨余あんどらあをけくるを地獄の地獄と教へる
能くおしりて知らる人我をさぐりて教ふらけり
人々地獄の二をいふ所とすりて地獄と云ふ
まう今を火獄生ずるがごとく火のササる内人の
一生のおとくし火消る時死す所の衆に死脱
ありし時消るる火地獄へ引く捨余へ引く地獄は
赤地獄と云く地獄捨余をさぐりて流し進みしもの
と云不悔く曰先生の教と云く是れその速に
とてその名のさるたるがごとく今を火獄のま
止めしと云われしと人世の中よりて是れま

風流道干傳



才下すれは法承の色里あんどとも拈行丁一法承
 か強る内中を面白るゆかち一なるり兼夜も有べ
 けれども必く若くも一とあおかし守法が修成能
 と再け去一海一時を射面をあすべしさうじく
 いかき、陸子の殊風の香法進、忙結と光好代
 此室の内小病りともあつて、さしやとあつれおかり
 こそものさしく、けし、在るふ例とるれば、被の着あや
 探し、おあをわが、けける

風流志を新傳卷之一終

